NPO法人

JSRC

2013年 6月 1日

第18号

Jomon Shiba

特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 18号

もくじ

新潟県十日町から－サブの散歩　☆ＪＳＲＣ理事　相澤重美 …… 2

アテルイの里・交流会のご案内(再) …… 3

シバの散歩道(18)　☆JSRC理事　根深　誠(文筆家・釣り師・元登山家) …… 4

補稿・上顎歯牙の磨耗について-金子先生との交流から　☆五味靖嘉 …… 7

お便りコーナー
☆北海道・橘さん　☆秋田県・福島さん …… 8
☆富山県・竹内さん　☆石川県・黒梅さん …… 9
☆大分県・石井さん …… 10

思い出の犬たち-14　☆柴犬研究所 五味靖嘉 …… 12

事務所報告　☆新入会　☆会費　☆御寄附　☆仔犬登録 …… 13
☆**2013年度 縄文柴犬研究センター　総会・理事会報告**－文責・土井鐵徳 …… 14
☆寄贈　☆文献紹介 …… 20

コンテ：五味画

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター

事務所　**郵便振替口座**　02280-2-106951
〒　014-0073　**秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5**　TEL　0187-68-2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

新潟県十日町から－サブの散歩

新潟県　理事　相 澤 重 美

2011年3月11日の東日本大震災。その翌日、3月12日には長野県北部大地震が発生しました。長野県に隣接する新潟県十日町市の私の家は、それによって半壊状態になってしまいました。この前年から、私は腰痛のため１ヶ月間の車椅子生活をしており、リハビリのため、さらに３ヶ月の入院・・・と、「パニック状態」に陥っておりました。そのような時に、偶然、新聞で「縄文柴犬」のことを知りました。早速電話をしたところ、７月には仔犬を渡すことが可能、ということでした。問い合わせた電話でのお話に大変感激をして、ぜひこの仔犬を入手したい、との思いを強くして往復約800kmの道のりを車で走り、「三郎」を連れて帰りましてからのお付き合いになります。

愛称・サブ＝樵の三郎―奥州五味・2011.06.06生
（羽磯の竜王×中の紅子）

私が住む、十日町市三省地区は、もと小学校だった建物を改装して、癒しの宿泊施設・「三省ハウス」とし、日本三大薬湯の一つ・松の山温泉を中心にいろいろなイベントを企画、実践しています。我が家はその施設のすぐ隣りにありますので(写真参照）、多くの人がここへ来るようになるにつれて、仔犬だった「三郎」はみなさんに可愛がられ、特に子供たちには人気があるのです。

当地は「美人林」と呼ばれるブナの二次林があり、愛称・「サブ」こと登録名「樵の三郎」というのは偶然ですが不思議な縁で結ばれているように思います。

2012年7月から9月まで当地域では「大地の芸術祭」というイベントがあり、全国から46万人もの人が訪れてくれました。この「三省ハウス」にも7500人もの利用客があって「三郎」はその人たちからたいへん可愛がられ、大人気でした。今冬は、「三郎」に会いにわざわざ来てくれた人たちがいたほどです。

昨年秋からこの冬の間の散歩中に、「狸」三匹を、自力で捕獲しました。みなさんのところでも、条件に恵まれさえすればこの縄文柴犬が備えている素晴らしい気性や能力を発揮できるのでしょうね。

美しい樵林や、よい温泉のある当地にぜひ、遊びに来てください。

(2013.04.10記)

三省ハウスは、校舎を改造した宿泊施設です。

アテルイの里・交流会のご案内(再)

―― お詫び･会誌17号のご案内は､不明確な点がありました。 ――

会場：奥州市胆沢区農業振興公社　セミナーハウス
所在地:〒023-0403　奥州市胆沢区若柳字大立目19
TEL　０１９７－４６－３７８０（FAX兼）
日時：６月１５日(土)
受付開始:ＡＭ9:30～開会:ＡＭ10:00～
企画１　愛犬自慢・会員交流会
12:00頃昼食（注）
企画２　13:30～　根深誠氏　講演会
演題「犬猫看板から見える人としての心のあり方」
閉会　15:00
参加費は無料。(但し､昼食代は個人負担)。
宿泊場所：奥州市焼石温泉ひめかゆ
岩手県奥州市胆沢区若柳字天沢52-7
TEL：　0197-49-2006
(素泊まり4,800円程度)
宿泊者有志による懇親会を準備中です。

(注）昼食について

昼食は、セミナー隣の農家レストラン「まだ来すた」にて、豆太郎セット（1,050円）を準備したいと思います。

希望者は申し出てください。籾殻で焚いたおこげご飯と地物にこだわった食材をお楽しみください。尚、ご飯はお替わり自由です。

○出陳申し込み用紙を同封しました(前17号)ので､必要事項 記入の上、受付に提出して下さい。
愛犬自慢の際の紹介に使います。
○また、参加・不参加に関わらず、愛犬の様子など､お知らせ下さい。
（会誌掲載の場合もあります）。
○準備の都合上参加の方は必ず記入して下さい。

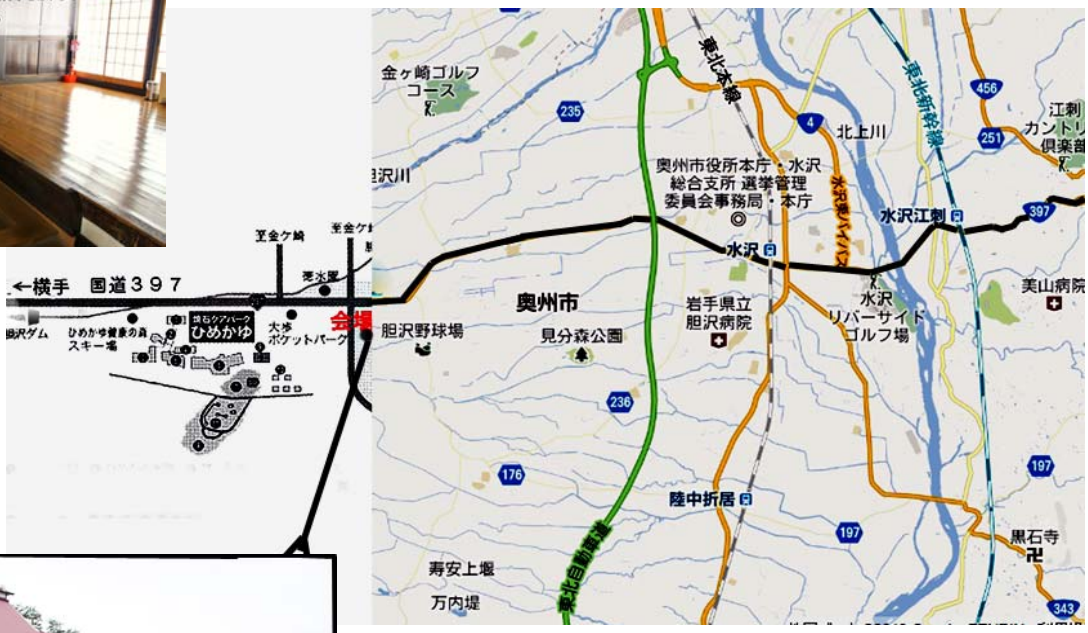
○参加する犬の管理は各自の責任でお願いします。(係留用具各自用意)
○雨具など､各自ご準備ください。
ご不明な点は表記へ問い合わせて下さい。

当日は参加費など無料ですが、昼食弁当は各自用意するか、食堂では有料にて注文ができます。

カ-ナビの場合は､住所入力でお願いします。

⇧セミナーハウス内部

会場・宿泊案内



⇩セミナーハウス外観

この地区は平安時代の蝦夷武将アテルイ発祥の地でもありますし、平泉・中尊寺も近隣であるということから、観光も兼ねてお越しいただいてもよろしいのではないかと思います。

シバの散歩道 (18)

根深　誠（文筆家・釣り師・元登山家）

この冬、わが家の庭にモズがやってきた。それ以前にも、たしか二回だと思うが、屋根にとりつけたテレビのアンテナにとまってうるさく啼き騒いでいた。しかし、冬に姿を見せるのは今回がはじめてである。

今回はわが家の居間から正面によく見えるブナの横枝にとまっていた。どうしたことかと訝しく思いながら観察していてわかったのだが、驚いたことにスズメを狙っていたのだ。

スズメは冬になると毎朝、シバが食べ残した餌を食べに群がってくる。田んぼが雪に覆われ、落穂を食べることができなくなるからだろう。餌場を失ったスズメの群れが来るようになってから、わが家では板で餌場をこしらえて観察しやすいようにしている。

シバはカラスに対しては猛然と突進して追い払うのだが、それ以外のキジバトやキジやヒヨドリやスズメには知らんふりしていることが多い。日溜まりで気持ちよさそうに寝そべっているとき鼻先で餌をついばんでいても知らんふりしていることがある。しかし、どういう風の吹き回しか、ときには追い払ったりするけれど、カラスに対するように唸ったり吠え立てたりして追い払うことはしない。

餌場をこしらえてからは、親スズメが口移しで仔スズメに給餌する様子を愉しむことができるようになった。

餌にありつくスズメをモズが狙うのは食物連鎖に適った行動でもあるのだが、回転の鈍い私は最初、モズが姿を現したとき、スズメを狙っていたことに気がつかなかった。いつもは餌にありついてチュンチュン、チュクチュク、ジィジィーッと小うるさく騒ぎ立てているのに、突然、ギャーッ、ギャギャーッと、これまで聞いたことのないただならぬ悲鳴が聞こえた。

何事かと思い、あわててカーテンを開けて庭を覗き見ると、たぶん仔スズメだと思うが、丈の低い庭木の枝に突き刺されて餌食になっていた。モズは頭を振り振り、スズメをついばみ続けた。

以来、わが家ではモズを「ギャング」と呼んでいる。

ギャングはその後、何回か、姿を見せたが、スズメも警戒するようになったのか、目下のところ餌食にされることもなく季節は春を迎えた。

⇩・ブナの横枝にとまっているモズ。

⇩・スズメを串刺しにしてむしって食べるモズ。

※　※　※

この冬、悲しむべきことに、シバの生家の主人・第十八代目石場屋清兵衛さんが他界した。享年七十五歳。生前、毎月、少なくとも一回は「石場屋」という銘柄の地酒を持参でシバに会いに来ることを愉しみにしていた。シバも石場さんが来ると姿をあらわす前から気配を察知し、とんでもなく興奮した声を張り上げて跳ね回り喜んだ。

死期が迫り、心身ともに衰退していく途上にあって、石場さんの眼差しは行きつく先を見据えていたようだ。すでに不安を超越したような安穏とした表情だった。仕方がない、生まれてきたからには諦めるしかないのだと嘆息を漏らす以外、私に何ができただろうか。

釣りと日本酒をこよなく愛していた石場さんは、霊柩車に納められて火葬場へ向かう道すがら岩木川の川べりを一巡し、永別した。

私は弘前市に本社のある地元紙に追悼を書いた。

第18代目石場屋清兵衛さんを悼む
＝釣りと日本酒と柴犬＝

「川さ行けなくなったし酒も飲めないし、もうこの世さ用はねぇ」

そう言われても私としては、うんだが、と小さく頷いて、

湯呑茶碗に注がれた「石場屋」を口に運ぶしかなかった。石場家の囲炉裏端で石場さんは茶をすすり、私は日本酒を冷で飲んでいた。

国の重要文化財に指定されたこの囲炉裏端ではずいぶん酒を酌み交わしたものだが、あるとき私は酒酊して正体不明のまま前のめりに倒れ、赤々と燃え盛る囲炉裏に顔を突っ込んだ。石場さんがすぐに抱き起こしたけれど、顔面の左半分が焼け焦げて、四谷怪談のお岩様のように醜くなっていた。

以来、石場さんは酒と肴は、私の横にではなく前に並べて、少しでも私を囲炉裏から引き離すようにした。そうすれば、あぐらをかいて前のめりに転んでも火元には届かない。

戒名を自ら決めて身辺整理をしていたとき出てきたテンカラ竿を私にくれた。まだ使っていないグラファイト製の三本継ぎで、頂戴して一年ほど経つが私も使っていない。春になったら石場さんを偲びつつ使おうと思う。

石場さんは死を宣告されて酒を絶ったが、アユの友釣りには連日のように出かけていた。例年になく暑い夏であり、釣り場で倒れて救急車で病院に運ばれたのだから、ただならぬ釣りとのつながりに、これぞまさしく釣聖の域に達していたのだと感嘆せざるをえない。

「目も見えなくなり、だんだん近づいてきた。坂をなめらかに滑り落ちるように静かな気持になっていく」

そのときも私はボソッと、うんだが、と呟くしかなかった。

石場さんが逝った一月十三日のその時刻、私は久渡寺に相談があって雪の石段を歩いていた。途中の道端に佇む、雪をかぶった石仏を拝んだ。石場さんが念頭にあったわけではないが、野にある道端の神仏に対して、片合掌で拝むのが私の礼儀でもある。

久渡寺の住職夫妻は酒をふるまい、私を歓待した。調子に乗った私は、雪下ろし作業に来ていた若者の車で夕方、送ってもらい、弾みがついて帰宅後も飲み続け、沈酔した。

翌朝、石場さんの奥さんから訃報が入った。家人が話していたのだが、昨日からわが家のシバが啼いたり吠えたりでうるさくしていたそうで、電話があったときも吠え立てていた。シバは石場家で生まれた雄の柴犬で正式には古城獅子号というのだが、柴犬だからシバと呼んでいる。石場さんの死をいちはやく察知したのかもしれない。

石場さんは歩行が困難になるまで、毎月のように日本酒「石場屋」を持参でシバを見に来ては、立派になった、たいしたもんだ、と喜んでいた。聞くところでは、「栗」と呼ばれていた孫婆さんにあたる柴犬は全国屈指の大会で入賞したとかで、その孫婆さんに似て、シバも栗色をしている。先祖返りしたんだべ、と石場さんは余計にシバを愛（め）ごがっていた。

寂しくなる。その儚さに沈思瞑目するほかない。寒中のしばれる朝、寒さが胸の中にしみ通る。

（『陸奥新報』2013年１月25日付）

※　※　※

春になって雪が消えたらシバと遠出、といっても散歩なのだが、ひさびさに「ヤバイ」ほうへ行ってみようと思った。

私が「ヤバイ」というのは、以前からさかんに問題にしている、ゴルフの打球が飛んできたり「犬猫立ち入り禁止」の立て看板が設置されていたりして、ひと目見ただけで気分を害するほど非常識な醜行がまかり通っている地区である。

そこは「アップルロード」という、市民の散歩コースとして市役所が維持管理しているのだが、その内容たるや、この誌上で連載しているような実態なのである。

改善を求めて訴え続けている私に、市役所に務める方々の多数は「虎の威を借る狐」よろしく権高な態度を崩さない。

俗悪な一例を掲げよう。

去年（2012年）夏、弘前市役所の釣り愛好会の一行が赤石川でアユ釣りを愉しんだ晩、温泉宿で酒宴を張った。人数は十人ほどらしい。そしたら奇々怪々、あろうことか、私が槍玉に挙がったという。

「犬猫のことで市役所にタテつくとは不届き千万、ちょこざいなやつだ。とんでもない。そうだそうだ。何でもあの野郎は若いころ登山家だったそうじゃないか。どこの山登ったもんだがサ。ロクな山でねべ。うんだ、うんだ。ロクなやつでネ。本書いデ、ジェンコ（銭ッコ）稼いでるらしいナ。どすたらダ、本書いデるもんだがサ」

おおむね、このような要旨だったらしい。

好き勝手放題にさんざんコケにして愉しんでいるとひとりだけ、私の著作を読んだことのある人がいて私の肩を持ったそうだ。

すると、こんどはその人が非難の集中砲火を浴びた。仲間はずれにされ、イワナの共食い状態になったのだ。

わきでそれとなく話を訊いていた温泉宿の主人は私とは旧知の仲である。市役所の職員たちはそのことを知らない。

「おめたちが罵っているのは我の友人だ。なんガ文句あるガ」

と凄んだところ、一瞬にして座がしらけて「ごまめの歯ぎしり」しながらお開きになったそうである。

じつのところ、三ヶ月でわが家に引きとられたシバを連れて散歩するようになって八年になる。この間、きれいごとを並べ立てる行政の実態が見えてきた。私に見えているのは、もとより氷山の一角だろうと思う。

「ヤバイ」ことが本音として裏面に潜んでいるのであり、「建て前と本音の違い」を巧妙に使い分ける術を心得ているのが行政マンである。このことを、ちょっとだけ親しい行政マンのOBに話したら、そんなこといまさら知ったのか、と鼻先で笑っていた。誇らしげに、いやにニヒルぶった態度を見せるのは、OBになってなお「虎の威を借りる狐」の化けの皮を着ているからではないかと思わずにはいられない。

とかく腹立たしい世の中である。おちおち散歩もできない。

※　※　※

「アップルロード」を久渡寺山、つまり土淵川の上流へ向かって散歩するのは今年に入ってはじめてだった。今年はゴールデンウィークの花見時になってもソメイヨシノは満開にはならなかった。ニュースによれば、ゴールデンウィークが過ぎてから満開になったという。

散歩コースにもソメイヨシノの並木道があるのだが、花数もまばらで葉が出はじめていた。何年か前にも似たようなことがあり、どうしたものかと友人の専門家に尋ねると、ウソの大群が花芽をついばんでしまったからだということだった。

散歩コースのソメイヨシノはみすぼらしい状態で咲いていた。

ゴルフの打球が飛んでくる場所を通りかかると、練習する人の姿が見え、打球音が聞こえてくる。ネットを飛び越えて、散歩コースの付近に散乱する打球の数が以前より少なくなっているのは、先日、町内会で実施したゴミ掃除で、ゴルフの打球も片づけられたからではないのだろうか。

きれいになった道端の水路には小魚が走っていた。以前、上流のリンゴ畑を流れる水路でアブラハヤを釣ったことがあるので、いま私が目にした小魚も同じアブラハヤかもしれない。

ゴルフの練習場のわきを通る散歩コースの前後二ヶ所には、打球が飛んでくるので危険だからという趣旨の立て看板が設置されていたのだが、いまはそれもなくなっていた。果たして問題が解決したのだろうか。何もなかったことに隠蔽したのではあるまいか。不気味で「ヤバイ」体質が感じられてならない。

この日、発見したのだが、庭のブナが実をつけていた。一週間ほど前に黄緑色の、産毛をはやした若葉が萌え出たばかりなのに花を咲かせ、実をつけたのだから驚くほかない。もしかしたら、芽吹く一週間ほど前に、込み入った枝を剪定したのが原因ではないだろうか。一昨年、実を生らせたばかりなので不思議でならない。

山から持ってきた苗木を植えて三十年ちかくになるが、結実したのは、これが四回目である。日々、散歩したり庭を眺めたりしながら、再生するいのちの連環を四季折々愉しめるのも、ささやかながら人生の喜びになっている。

〈キャプション〉

①ゴルフの打球が飛んでくる危険を知らせる立て看板。加害者を放置し、被害の恐れがある散歩者に注意を促しているのも解せない。(会誌5号にも掲載)

②設置の翌年には白く塗りつぶされた。

③今年、行ってみると立て看板は撤去されていた。

① ⇩

② ⇩

③ ⇩

⇩・萌え出る若葉とともに花を咲かせ、実をつけたわが家のブナ。